

9. 各集落のコミュニティの特性

8. で述べた各集落の関係図をもとに、コミュニティの特性を三つのパターンに分類する。

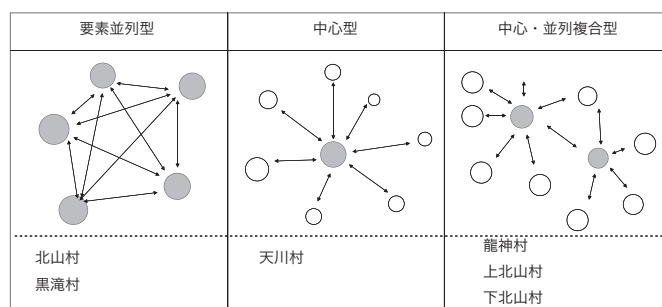


図5. コミュニティの特性のパターン

1) 要素並列型

要素並列型は、それぞれのコミュニティの要素が各集落に分散し、それぞれがお互いに関係性を持って、集落内に存在する。それらの要素が対等に存在し、互いに影響を及ぼし合っている。これは、縮減化による影響で生じた新しい組織や活動が、集落の特別なリーダーが行うのではなく、住民の中から多くの新しいリーダーが生まれたことが要因である。誰かが指導するのではなく、身近な住民が周りの住民と組織を作り、各々の役割を果たすことによって、成り立っている。そうすることで、横の繋がりが強く、他の要素とも繋がりがやすいため、やがて集落内に張り巡らされる。

2) 中心型

中心型は集落内に核となる要素が存在し、それが他の要素と密接に繋がっている。その核となる要素は、集落の縮減化に伴い集落の要素が縮小していく中、集落に必要な活動を新たに増やしていき、多くの要素と関係を持っている。集落に核の組織があることによって、多くの住民がそれに属し、その組織が集落の状況に合わせて柔軟に対応していくため、情報が伝わりやすく、すぐに対応することができる。そして、集落内が隔たりなく、需要に対応することができる仕組みになっている。

3) 中心・並列複合型

中心・並列複合型は、住民の活動・交流の中心となる要素が集落内に複数見られる場合を指す。そして、それらが中心となって、他の要素と関わることで、住民の需要に柔軟に対応できるようになる。複数の核があることによって、住民は必要に応じて拠点を移すことができ、生活をより多様化、複雑化することが可能となる。そうすることで、生活に選択肢を増やし、自分らしい生活を送ることを可能にしている。各同士の関わりは薄いですが、それぞれの役割が明確であるため、住民もその状況と役割によって、場所を選ぶことができる。

10. 結論

集落は縮減化によって、住民の生活におけるニーズは変化している。今まで、自助だけでできていたことが共助や公助を必要とせざるを得ない状況となる。その必要度は住民によって異なり、その多様性に対応できるように、集落の中で、様々なコミュニティの形態がつくられている。その結果、以前は見られなかった連携や協力、助け合いなどを内発させ、お互いに生活を円滑に、豊かにするための努力が見られた。

集落がホスピス型地域となる場合、まず人口規模でみると、人口が多いほど既存の組織が残り、その組織が縮減化に合わせて活動を変化させている。また、1000人前後の人口規模の場合、大きな組織としての活動には限界があり、新たな活動形態を作り出していた。それに合わせて属性も変化させ、一人の住民が多くの役割をもつことによって、生活の質が担保されている。また、下北山村では、既存の組織も縮小しながら残り、それらが補完し合うことによって、活動の継続を可能にしている。さらに人口が少ない地域では、一応組織は存在するが、その団体ごとの活動としてではなく、住民全員参加で助け合う形態であった。これらは、集落の規模の変化に応じて住民の属性や活動の単位が変化しており、住民自ら生活や集落の状況に問題意識を持ち、柔軟に変化させていった結果である。

また、学校と地域の関わりにおいても、人口規模が大きいほうが、多様な関係が築けている。しかし、それが少ない地域においても、より密着した関係が築けており、その地域なりの活動の工夫がある。

縮減化した集落では、できる活動が限られているため、住民だけで生活の需要に応えることは難しい。しかし、それを複層化させることによって、より多くの需要を満たすことを可能にしている。それを住民が主体となって生活から気づくことによって、柔軟に生活が変化している。各集落において、コミュニティの形態は異なるが、その地域の状況に合わせて、住民は生活を変化させている。縮減化する過程によって、かたちは異なるが、トップダウン式ではなく、並列的なコミュニティの形態を創り出している。それは、住民自らが考え、生活の質的転換をし、行動しているからであり、その集落のネットワークが多層化することで、生活を豊かにすることができる。

各々の集落での生活において、いかに自分らしい生活が送れているのかということへの追求に価値をおくことは、生活の質的転換であり、縮減化した集落では自助・公助・共助のどの要素がなくなってもそれを達成することはできない。しかし、このようなホスピス型地域づくりにより、住民は自らの生活の質を追求し続け、生活に豊かさをもたらすことができる。

討議

討議 [倉方俊輔]

この論文の研究意義がわからないのですが。この「ホスピス型地域づくり」が学会論文で定義されていなければ、そう書くべきです。朝顔の観察日記のようで、事例がつつらとあるだけのように感じました。地域活性化などがある中で、ホスピス型の研究する意味はあるのですか。研究意義をもう一度説明して頂けますか。また、この論文ではどの集落でもホスピス型集落であるかのように思うのですが、他の集落の見る必要があるように思います。

回答

はい。まず、発表でもありましたが、地域活性化や撤退集落の研究は今までも多く為されています。その中で、集落が消滅する過程における集落の質の維持の研究は為されていません。私が調査対象とした集落も過去に一度は地域活性化を意図とした政策がとられているものばかりです。そして、現在ではその施設が残るぐらいで、その恩恵は何一つ残っていません。これから、このような集落が増加することは安易に予想することができ、そのような集落が今後、生活の質を向上させ、住民が生き活きと豊かに生活するために、ホスピス型地域づくりの仕組みや影響を解明する必要があります。そして、今後そのような集落のために、ホスピス型地域づくりの有用性や優位性を示すことが重要だと考えています。

また、実際に私が調査した集落の中にはホスピス型集落でない集落も多々見られました。私は、この調査を通して、住民のこの集落で一生暮らしたいとか、村の他の住民のために役に立つことがしたいとか、それによって、生き甲斐を感じているという住民に多く会って、そういった気持ちや意志がとても重要だと感じました。ホスピス型集落でない集落は住民のそういった意志があまり感じられませんでした。この論文では、ホスピス型集落だけを対象としており、その他の集落との比較は目的としていませんが、今後そのような集落と比較することが課題だと考えています。

討議 [嘉名光一]

2点あるのですが、まず一つ目は、分析がわかりにくいところがあったんですが、表それぞれに共通点はありますか。もう一つは、事例が多くて、とても調査されたのはよくわかるのですが、実際に生活の質的転換によって、質的満足が得られた事例をひとつあげてください。

回答

前者の質問ですが、コミュニティの特性の図については、その前に説明した集落内関係図を三つに分類し、特徴を示しました。集落内関係図のまとめとして示しています。また、その次にあった人口規模からみた表では、人口規模と集落内関係図ではどのような関係があるかをみました。その2つが重なれば良かったのですが、そうはなりませんでした。しかし、例えば黒滝村だと、コミュニティはネットワーク型で人口規模では1000人前後で新たな活動が多く発生しています。このように、集落内関係図から、それぞれの集落のホスピス型の特徴のまとめという位置づけで示しています。

後者の質問については、黒滝村という対象地では、婦人会などの既存の組織がなくなり、集落内で住民が顔を合わせる機会も少なく、集落での活気や生活の張りがなくなったということを知りました。そこで、まず一人の人が住民や村のために何かできないかということで、子育て支援や高齢者見守りという新しい活動を始められました。そこから、多くの活動が発足して、それに住民の方々がやり甲斐や生き甲斐を感じています。そのように、自分の生活を変化させながら、やり甲斐などを感じ、生活を豊かにしていることは、生活の質的満足を得られている一つの例だと考えています。